



『相馬の製鉄遺跡群』

中国山地での製鉄は、調として鉄や鉄を納めたことがよく知られています。さて、東国では製鉄は行われていたのでしょうか？

先般、相馬の製鉄遺跡群のことを書いた本に出会いました。それによると、福島県の浜通り地方の武井地区・金沢地区に『かなご（金子）』と呼ばれる小字（こあご）名や通称地名が点在しています。そして、そこには『鉄滓（てっさい）』と呼ばれる製鉄時に出る『ノロ』『カナクソ』が大量に散らばっています。しかし、これらの製鉄遺跡がいつごろのものか判りませんでした。

1984年～1987年にかけて武井地区の発掘調査、1988年～1994年には金沢地区の調査が行われました。そして製鉄が行われた時代やその内容、歴史的な意義が解明され、製鉄遺跡の評価が飛躍的に高まりました。製鉄が行われた時期は7世紀後半から9世紀中葉までです。浜砂鉄を原料に木炭を使用した炉です。その炉型によりⅠ～Ⅴ期に区分されていますが、大量に製鉄されたのでしょうか。金沢地区では鉄滓が617トンも出土しました。

最盛期のⅢ期（8世紀中葉）には製鉄炉・鍛冶炉・住居跡・木炭窯がセットになったものと、鍛冶炉を伴わないものがあります。

製鉄の始まった7世紀には浜通り地方で須恵器・瓦生産も始まっています。鉄の生産（製錬・鑄造・鍛錬）に関わる新しい工人集落も成立しています。鑄造遺跡も発見され、鑄型から梵鐘や鍋などもつくられたようですが、どんな工人たちが、どんな道具を造ったのか興味の尽きないところです。

ちなみに、この金沢地域での製鉄は880年ころに終焉を迎えています。

Ⅰ期：7世紀後半	両側排滓の長方形箱形炉。縦置きが多く、尾根上に立地。 両側に方形を基調とする作業場・排滓溝。羽口の出土が少ない。
Ⅱ期：8世紀前葉	片側排滓の長方形箱形炉。斜面に立地。 羽口が出土。 大きい掘形に炉が設置。複数の炉が重複。
Ⅲ期：8世紀中葉	片側排滓の長方形箱形炉。羽口が出土。 基礎構造が見られないものが多い。 炉の長辺両側に平坦面や掘り込みがあり、送風施設か？ 竪形炉出現。
Ⅳ期：8世紀後葉 ～9世紀前葉	踏みふいごの付設された長方形箱形炉。 羽口が出土。 3基並立する炉や2基並立する炉（鳥打沢タイプ）が出現。 竪形炉も併存。
Ⅴ期：9世紀中葉	踏みふいごが付設された長方形箱形炉。 羽口が出土。 単独で立地。炉底に掘形がある。

図38 ●製鉄炉の展開



図39 ●9世紀前半の製鉄のようす
鳥打沢A遺跡の製鉄炉を参考に復元した操業のイメージ。

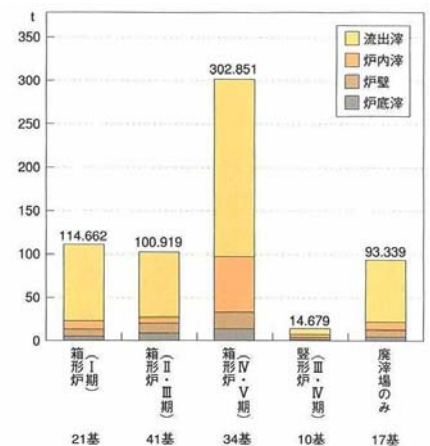


図40 ●金沢地区の製鉄炉から出土した鉄滓量の変遷

参考図書

律令国家の対蝦夷政策 相馬の製鉄遺跡群 飯村 均 2005年 新泉社

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>
<http://www.kanamonoya.co.jp/>
ryou@memenet.or.jp

Tel 079-234-1515

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！